

弔辭

著者	内野 熊一郎
雑誌名	漢文學會々報
巻	7
ページ	9-9
発行年	1938-03-17
URL	http://doi.org/10.15068/00146841

弔 辭

昭和十二年十二月十三日、恩師島田鈞一先生溘焉として薨去せらる。哀痛何ぞ禁へん。生等謹みて茲に先生の英靈に告げ奉る。

顧みれば昭和四年四月、我が國教育の大根本を確立せんとして、文理科大學が大塚臺上に創設せらるるや、先生早くも漢文學科教授として、招かれて學園に在り。特に生等の爲に深遠なる家學相傳の經學大義を説かせ給ひ、一に邦家教育の大本達成を冀圖し、併せて中正の學風を以て大塚學運の勃興を望ませられ、終始實踐躬行門下雲衆の向ふ所を闡明せさせ給へり。

生等不肖の才を以て幸に笈を膝下に負ふを得、向學の意に燃えつゝ、只管精進するを得たる所以のもの、偏へに先生の御學徳の薰化に據らずんばあらざるなり。

今や其の門に及びし者數十を降らず。何れも四方に祿仕して邦家教育の期待に對ふるところあらんとし、且は御薰陶の萬一に報ゆるものあるに至らんとす。然るを一朝忽焉として聖衆の來迎を見る。嗟呼笙歌遙に孤雲に懸り、幽明即ち境を隔つ。生等明日を何れにか期せん。心胸爲に切迫、言ふべき所を知らず。只々天翔らせ給ふ御靈の前に、汲めども渴きせぬ御鴻恩を謝し奉り、一同誓つて御遺教に背かざらんことを期し奉る。謹みて微衷を披瀝して弔辭とす。